

社会科授業案

教科で育みたい人間像 「社会に参画し、創造し続ける人」

授業者 井村 和仁

- 1 日時 令和6年11月1日(金) 第2時 11:30~12:20
 2 学級 1年B組 (1年B組教室)
 3 題材名 何が難民を生みだすのだろう

4 本題材で願う学び

世界で難民が生まれ続ける原因を調査する活動を通して、難民が生まれる背景に、国や地理的・歴史的要因などが複雑に関連し合っていることに気づき、問いに対して多面的な視点から追求し、難民問題を解決する方法について考えを深め、よりよい社会のあり方を自分ごととしてとらえることができる。

(学習指導要領との関連：(2)世界の諸地域 イ(イ)地球的課題)

5 これまでの学び

(1) 社会的な視点からとらえる楽しさ

社会的事象に関して子どもたちが気づきや疑問、思いを自然に抱きやすい題材として、子どもたちが一度は目にしたことがある「地図」を扱った。子どもたちは、これまでの経験や知識を生かしながら、用途に合わせた豊富な種類の地図があることや、日常生活のどのような場面で活用されているのかなどを語り合った。その中で、「国境線にはどのような意味が込められているのだろう」という疑問を子どもたちと共有した。子どもたちはこの疑問を、歴史的な面から見つめ、地図が植民地時代にヨーロッパ諸国によって作られた事実があることに気づき、国境線が人々によって作られたという経緯が見えてきた。このことをきっかけに、現在でも戦争や紛争によって領土が変わったり、国が増えたりすることで国境線が変わることに気づいた。以上のことから、地図がただ単に位置情報を示すものではなく、現在の社会におけるさまざまな要素を含んでいるものだという学びを得たといえる。このように日常生活の中にある事象に対して、社会的な視点からとらえる楽しさを積み重ねてきた。

(2) 社会的事象を多面的な視点でとらえる

世界のさまざまな気候を学習する題材では、世界各地の「人々の暮らし」がどのように成り立っているのかを考えた。子どもたちは、人々の暮らしをとらえるなかで、地域ごとに「気候、宗教、自然環境」などの地理的条件があることに気づいた。それらの地理的条件を六つの州ごとに手分けをして調査しながら、地域ごとにある衣食住の工夫に目を向けた。地域ごとに存在する地理的条件を変えることはできないため、衣食住のあり方と気候や地形の関係性を結びつけることで、そこに暮らす人々が長い時間をかけて工夫を凝らしながら生活していることを

見いだした。そうした地理的条件や人々の工夫を地域ごとに結びつけていくことで、より具体的なイメージを伴った地域的特色を見いだした。また、そのような州ごとの地域的特色を全体で共有し、「人々の暮らしを成り立たせるのに一番大切なものは何か」という問いのもと、これまでの事実を多面的な視点から考察した。語り合いでは、「気候によって衣食住に影響を与えている」「自然環境がその地域で行われる産業のもととなっている」など、これまで調査してきた事実を根拠としながらその子なりの思いを大事にしながら自らの考えをもつことができた。中には、「同じ州にある国同士でも宗教が異なることで、生活文化が大きく異なっている」と考えた子が、慣習や服装など表出する特色から、考え方や価値観の違いなど内面的な部分にまで目を向けて、考えを深めていた。これらのように「人々の暮らし」について調査した内容を根拠に、多面的な視点からとらえ、自らの考えを構築する学びをしてきた。そうした学びを通して、子どもたちが世界の人たちの暮らしをより身近に感じることができた。

これらの学びをもとに、日常の当たり前にある「事象」を「社会的事象」としてとらえ、興味や疑問をもち、さまざまな視点から考えたり解決したりすることを積み重ねてきた。

6 題材観

(1) 本題材の価値

「難民」の世界的な定義は、1951年「難民の地位に関する条約」(以下「難民条約」)で厳密に定められている。そこには「難民」を「①人種や宗教、政治的意見などの理由で迫害を受ける恐れがあること。②自国の保護を受けられないか、それを望まな

いこと。③自国の外に居ること。これら①から③全て含むこと」としている。現在、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、「国外にある者」だけでなく、国内にある者を「国内避難民」として援助と保護の対象とするようになった。こうした定義のもと2024年5月の時点で世界の難民数は1億2000万人にのぼり、以下のグラフのとおり、2010年以降、急激に増え続けている。（図1）



図1 世界の難民数の推移

また、国内の激しい戦争や紛争については「紛争難民」、気候変動に伴う洪水や海面上昇が起こることによる「気候難民」、国内の経済的不満や生活困窮、深刻な飢餓などによる「経済難民」など、世界各地でさまざまな要因による難民が存在している。さらに、難民のうち、子どもの割合が約4割以上を占めており、教育が保障されていない難民キャンプも多い。この生活が何年も続き、中には「難民二世」と呼ばれる子どもたちも現れてきた。避難した先で出生した子どもたちは、両親がもつ母国の文化と避難した国の文化それぞれを抱えた状況の中で暮らしている。こうした状況により、言語や宗教をはじめとする文化の差異や教育環境の不足などから、将来の就職が困難になり、貧困に陥り、苦しい生活を余儀なくされている。社会構造の中に潜む、難民問題の根本的な原因となるものを明らかにし、本質的に解決しない限りは、今後も難民問題が起り続けるだろう。

日本においては、今年6月に外国人の送還や収容のルールを見直した改正出入国管理法が施行された。これにより日本の難民申請の基準や難民への対応が見直される一方、難民を受け入れる体制として不透明な点が多く課題が残されている。さらに、日本の人口は2010年の約1億2800万人をピークに減少傾向に転じている。日本政府は人口政策の一つとして、移民や難民の受け入れについて検討を進めている。実際、外国人技能実習生や留学生が年々増加している。このような社会の流れから、今後の日本社会において外国人のもつ文化や価値観の多様性を理解することは、より求められるようになるだろう。こうした社会の変化は、地球規模での公正な判

断やより合理的な結論を導き出すための見方や考え方を私たちに求めているといえよう。

①日本人が難民を学ぶ価値

日本は難民条約を批准している国だが、日本が定めている難民認定基準が厳しく、難民認定者数及び人道配慮による在留許可者数は1962人と、世界の中でも難民認定数が少ない状況である。日本が難民を受け入れない立場をとっていることから、難民問題は私たち日本人の意識の外にある事象といえよう。この現状から子どもたちの日常生活においても難民との接点がなく、どうしても自分ごとになりづらいものであると考える。また、子どもたちにとっての難民は「何か理由があって国にいられない状況の人たち」「生活が苦しい人たち」など、漠然としたイメージであり、身近な存在ではないといえる。しかし、実際の難民の現状を見てみると、何らかの問題により、暮らしの場を奪われ、母国に居ることができない厳しい状況が見えてくる。親が自分の子どもを抱え「子どもだけは助けてほしい」と救援活動をする人たちに訴える姿から、難民が大きな心の傷を負っていることが容易に想像できるだろう。もし、国外に脱出できたとしても、避難先の難民キャンプで待っているのは、支援団体から食糧や水をもらい、働く場所もなく、一日を簡易テントの中で過ごすような生活だ。このような現実とはかけ離れた社会の存在である。その事実と子どもたちが会うことで、大きな衝撃を受けるだろう。そしてその思いは、よりよい社会をめざそうとする思いを生みだし、学びの原動力となるだろう。

②難民問題を多面的な視点から考える

難民問題について考えるためには、多面的な視点をもつことが必要になるだろう。そのためには、異なる要因を背景にもつ難民に焦点を当てる必要がある。今回、授業でとり上げるのは、コンゴ難民（コンゴ民主共和国）、パレスチナ難民、エチオピア難民、ロヒンギャ難民（ミャンマー）である。コンゴ難民は、貧困や資源をめぐる紛争が要因として、パレスチナ難民は、民族や宗教的な要因として、エチオピア難民は、内戦と環境問題が要因として、ロヒンギャ難民は、民族問題による要因など、さまざまな要因を抱えている。そこで暮らす「民族」がどのような文化的、社会的な背景をもっているのかを地理的な視点に限らず、過去に起きた民族同士の対立や内戦などのような歴史的な視点からもとらえていくだろう。子どもたちが、難民問題の原因を考えるために、多面的な視点から要因を見だし、複数の要因同士をつなぎ合わせたり、関係性を考えたりすることのできる題材である。

難民問題は世界各地で起きており、地球的課題である。こうした課題と向き合う経験は、子どもたちの世界の見方を変えるだろう。さらに、難民問題は公民的な視点からその国の政治や国家のあり方などをとらえたり、難民に関わるさまざまな立場からも考えたりすることができるため、学年を経るにつれ、より視点を広げられる題材といえる。学年を通してさまざまな視点をもってとらえていくことで、社会的事象に対する見方や考え方は、より豊かになっていくだろう。

(2) 本題材で願う子どもの姿

本題材で願う子どもの姿は、大きく三つある。

一つめは、「難民問題の本質的な解決をめざす姿」である。子どもたちは、世界各地の人々が気候や宗教、民族など複数の要素によって独自の文化を形成し、暮らしていることを学んできた。しかし、そのような海外での営みを実際に経験したことがないため、あくまで知識の面における表面的な理解にとどまっている。また、日常生活の中で、ニュースなどのさまざまなメディアを通して紛争や戦争に関する情報を得ているはずである。そのような子どもたちが、難民問題と出会うと、難民の存在に対して興味や関心をもつだろう。安全に暮らしていた人たちが難民となるまでの険しい過程や、難民となっただけからの厳しい生活を知ること、より興味をもち、難民問題を追求したくなるだろう。難民問題への興味をもち始めた子どもたちは、調査や共有を通して、「なぜだろう」「どうしてそうなるのだろう」というさらなる疑問を抱き、難民の複雑な背景にも迫っ

ていこうだろう。そうした過程を経て、「難民がどのようにしたら豊かな暮らしができるのか」という思いをもとに難民の人たちの思いに寄り添って考えることを期待する。

二つめは、「国や地域の地理的・歴史的な視点から難民問題をみていくことで、多面的にとらえていく姿」である。難民問題が起こるさまざまな要因を見つけた子どもたちは、本題材の中で「宗教同士どうしの対立には、過去の争いが関係してそうだ」「紛争や戦争の背景には、地理的な位置や民族どうしの関係が影響してそうだ」など、要因同士をつなぎ合わせたり、関係性を考えたりするだろう。そうして見いだした要因を、国や地域の特性と関連づけていくことで、難民の背景をより立体的にとらえ、子どもたちなりの言葉でその国や地域で難民を生み出す原因について語り合うことを期待している。

三つめは、「地球的課題を考えるうえで、さまざまな事実や事象を根拠として、自分なりに解決策を見いだそうとしている姿」である。難民問題は容易に解決できるものではなく、解決するための糸口をみつけることすら難しい。しかし、そのような課題に対して粘り強く考え、自分なりの原因を見つけたし、「何とか解決したい」という強い思いをもつ中で、一人一人が大切にしたい考えや価値観に気づき、語り合っていく姿を期待している。また、難民問題やそれ以外の課題に対して、世界で起きていることだからといって他人ごとにするのではなく、自分自身の生活との結びつきや、日本とのつながりを見いだすことができたらより素敵である。

7 題材構想 (全7時間)

- | |
|--|
| <p>(1) 世界のトップアスリートが難民！？ (1時間)</p> <p>(2) 難民となった人たちは、なぜ母国を離れたのだろうか (4時間)</p> <p>(3) 何が難民を生みだすのだろうか (1時間：本時)</p> <p>(4) 難民問題を解決するために、大切なものは何だろうか (1時間)</p> |
|--|

本題材は、世界で起きている難民問題の原因を追求する活動を通して、国の地理的・歴史的な要因が複雑に関連していることに気づき、多面的な視点から自らの考えを深めていくことを願っている。

(1) 世界のトップアスリートが難民！？ (1時間)

子どもたちに難民の存在を身近に感じてほしいため、今年の夏に開催されたパリオリンピックで、難民選手団が入場したときの映像資料を提示する。「世界のトップアスリート」が「難民」であることを知った子どもたちは、その人たちの存在に興味をもつだろう。そこで授業者は、難民選手団にかかわるエピソードを紹介したり、難民の暮らしがわかる

映像資料を提示したりする。子どもたちは難民問題を知っていくことで、難民に興味をもち始めるだろう。その後、難民について調べたり、知っていることを周囲の人や授業者と話したりすることを通して、「難民になるってどういうことだろう」「難民の人たちはどのような暮らしをしているのだろうか」「どうして難民になったのだろうか」という思いをもつだろう。授業を終えた際に、以下のような追求の記録が見られるだろう。

- | |
|--|
| <p>・オリンピックに難民の選手が出場していたことを初めて知った。苦労しながらも、それを上回る努力をしてオリンピックの舞台に立てたことは</p> |
|--|

すごいことだと思う。

- ・難民選手の母国では、どうして紛争や戦争が起きていたのだろう。
- ・難民の人たちの暮らしが大変なのはわかるけれど、自分の周りには難民はいないから、何となく実感がわからない。
- ・日本に難民はいるのだろうか。
- ・難民は世界で問題になっているのはわかるけれど、どうしてそうなっているのかは、難しいからよくわからない。でも、何かかわいそうだからもう少し知りたい。

など

(2) 難民となった人たちは、なぜ母国を離れたのだろう (4時間)

前時で難民問題への関心が高まった子どもたちに、「難民はどのような人たちだったのだろうか」と難民についてふり返る。この後、難民となった原因について考えるために「なぜ難民になったのか」という問いを共有する。子どもたちは、「紛争や戦争が起きたから」「宗教の対立が起きているから」「環境問題もあるかもしれない」など、予想を口にするだろう。社会科では、根拠となる事実や事象を明確にすることを大切にしたいと考えているため、授業者が、子どもたちから出た考えが本当に要因となっているのかを確かめるために、調査することを提案する。この際、四人組に分かれて、調査を行う。なお、調査対象については、難民問題を引き起こす異なる要因を含む、以下の四つの難民から選び、四人で分担して調べることとする。

- ①パレスチナ難民
- ②コンゴ難民
- ③エチオピア難民
- ④ロヒンギャ難民

調査した内容について、同じ難民を調べた者同士で情報共有をしながら、最後の時間に班で調査した内容について共有する。それを受けて、子どもたちは以下のような思いや考えをもつだろう。

- ・パレスチナ難民やロヒンギャ難民は、どちらも宗教（イスラム教）が深く関係している。イスラム教であるパレスチナのハマスは、ユダヤ教のイスラエルと争っている。ハマスは自爆テロまで起こし、危険な存在だ。
- ・エチオピア難民は、かつては国のあり方が社会主義かそうでないのかで紛争が起きていた。しかしそれらを乗り越え、周辺からの難民を受け入れられるほどの国になったが、つい最近まで内戦が起きていた。現在は洪水などの異常気象の影響で避

難している。

- ・かつて植民地支配を受けていた国は、第二次世界大戦の後に、独立をした国が多い。それを理由に紛争が起きている。
- ・貧しさが原因で、武装勢力になることを選ぶ人もいるようだ。だからコンゴのような貧しい国では資源が争いの原因となっている。
- ・ロヒンギャ難民は、イスラム教徒で武力勢力だったから、ミャンマーの政府から迫害を受けるきっかけとなっていた。

など

このような考えを見いだした子どもたちに、その国を取り巻く状況や背景を理解したうえで、地理的な視点にも目を向けてほしいため、授業者が「難民を生み出す国とはどのような国だろう」とさらなる問いを共有する。子どもたちは、それまで考えていた要因を違った角度から追求していくだろう。例えば、「エチオピアで起きている内戦や洪水は、何が原因で起きているのだろうか」「ロヒンギャのイスラム教はどうして武装勢力になったのか、パレスチナのイスラム教と何が違うのだろうか」「コンゴではなぜ貧困問題が起きているのだろうか」など、その国の地理的な視点や歴史的な視点を働かせながら、より深く考え始めるだろう。そのような追求を経て、調べた内容を班で共有すると、以下のような考えをもつだろう。

- ・民族の壁が大きい気がする。民族と言っても、もとをたどると、言語の違いがある。これによりどうしても意思の疎通が難しく、互いに理解し合えないのかもしれない。
- ・地理的な立地や地形によってはサイクロンや台風などの異常気象の影響が大きく、エチオピアは特に被害を受けやすいホットスポットと呼ばれる所である。
- ・コンゴのような貧困となっている場所では、仕事がなく児童労働が行われている。つまり、教育を受けることができなく、国が発展しないのではないかな。
- ・イスラム教徒の中でも「イスラム過激派」というような宗派があるように、武力をもとに自らの理想を実現させようとしている。このような人たちと理解し合うにはどうしたらよいのだろう。
- ・一つの民族につき、一つの国が存在するようになれば、はたして紛争は起きないのだろうか。
- ・イスラム教への理解が足りないのかもしれない。

など

(3) 何が難民を生み出すのだろうか (1時間：本時)

前時までの調査やその共有を受けて、原因に迫っ

てきた子どもたちは、難民問題の原因について学級全体で語り合う中で、授業者が「何が難民を生み出すのだろうか」となげかける。子どもたちは、これまでの授業をふまえて、「言語や民族の壁だと思う」「民族のアイデンティティではないかな」「環境だと思う」などのような考えをもつだろう。その際、本質的な原因に迫りそうな部分については、授業者が問い返しをして掘り下げていくなかかわりをしていく。

【地理的な視点】

- ・言語や民族の壁だと思う。何とかして乗り越える必要があるけれど、方法がわからない。
- ・民族のアイデンティティだと思う。それ自体は悪いものではないのだけれど、それぞれの主張が強く、民族に対する理解が足りなさすぎると思う。
- ・環境だと思う。人の力ではどうしようもできない地形や気候などの自然の力が圧倒的に大きい。現在は日本も含めて世界で異常気象が起きている。
- ・貧困だと思う。背景はさまざまだが、特に途上国での格差が大きく、争いのもとになる。負の連鎖が生まれる。
- ・民族同士の協力や理解だと思う。少数民族とそれ以外の民族とで、互いを尊重する思いがないと主張を言い合い、権力の奪い合いに発展する。
- ・地理的な価値の高い場所だと思った。エチオピアは、「アフリカの角」と呼ばれるほど重要な場所でもあり、今でもナイル川の水の権利をめぐる争いが起きている。コンゴでは資源を巡った争いがあり、過去にも紛争が起きているから今後も紛争が起こる可能性がある。

【歴史的な視点】

- ・歴史的な負の遺産ではないか。過去のトラブルを解決しないまま現在に至っているところに問題があると思う。
- ・まだ勉強していないけど、植民地時代の影響が大きいように感じた。植民地支配が終わった後、独立したときに民族同士の対立が起きていた。

など

(4) 難民問題を解決するために、大切なものは何だろう (1時間)

本質的な原因について語り合い、見方や考え方が豊かになった子どもたちから、難民問題を解決するための考えや思いを引き出すため「難民問題を解決するために、大切なものは何だろう」となげかける。子どもたちはこれまでの活動で考えたことや、感じたこと、自分自身が大切にしたい願いなどをもとに、以下のような考えをもつだろう。また、授業者は、

語り合いの中で子ども自身の難民問題に対する願いや思いの部分をもっと引き出すような言葉がけを行う。

- ・その国や地域、民族だけの問題にせず、周辺国と一緒に考えて考える必要がある。ただ、理解を示すだけでなく、異なる文化や価値観を受け入れることの大切さを知ってほしい。
- ・日本人は、民族の意識はほとんどないけれど、世界の民族の意識はとても高いと感じた。その意識が高いということは自分の国や民族を大切にしていることだと思う。周りの人は相手の民族に対する価値観を理解するために、宗教や文化などその人たちがおかれた状況を知ることでお互いをわかり合うことができるようになると思う。
- ・教育に力を入れるべきである。私たちがこうやって難民を学んでいるように、問題がなぜ起きるのかを現地の子どもたちにも学んでほしい。世界にはさまざまな思いがあるが、自分の国や地域をゆたかにするための考え方や方法をきちんと学ぶ機会を確保してあげたい。
- ・難民を出さないためには、貧困をなくさなければいけない。さまざまな格差がある中で、貧しさは争いの根本的な原因となっている気がする。だからこそ、先進国が途上国に対して技術支援することの価値があり、自立することにつながると思う。
- ・難民の生活を助けないと命に関わる。だから難民を助けている組織 (UNHCR や NGO など) をもっと、世界規模で協力や支援をしなければいけないと感じた。
- ・方法はわからないけれど、イスラム教への理解が必要だと感じた。テロを行う過激な組織もいるが、それらとは異なるイスラム教徒の人が大半だと思うので、きちんと理解していきたい。
- ・日本も他人ごとではなく、きちんとこの問題に向き合わなければいけないと思った。もっと難民を受け入れる体制をとるべきだ。

など

このように難民問題を自分ごととしてとらえ、自らの考えを語る姿を期待したい。さらに、思いだけではなく、社会的な視点から考えることで、より深く物事をとらえたり、考えたりすることの学びが感じてもらいたい。そのような経験を重ねていくことで、地球的課題に対しても、立ち向かうことのできるたくましい人となるだろう。そして、そのような人たちがよりよい社会のあり方を追求し、実現していくことを期待している。

- 参考文献：稲葉茂勝(2019)『池上彰が解説したい！国民・移民・難民 難民って、なに？どうして困っているの？』筑摩書房
緒方貞子(2013)『共に生きるということ』PHP 研究所
文部科学省(2017) 『学習指導要領解説 社会編』
矢ヶ崎典隆 森島済 横山智 編著(2018)『シリーズ地誌トピックス3 サステナビリティ地球と人類の課題』朝倉書店
- 参考資料：藤原孝章(1999)「難民問題を考える社会科の授業方略—単元開発のための教材理解と授業づくりの視点について—」
パリ 2024 オリンピック <https://olympics.com/ja/paris-2024>
認定 NPO 法人難民支援協会 <https://www.refugee.or.jp/>
国連 UNHCR 日本 <https://www.japanforunhcr.org/>
出入国在留管理庁、令和4年度資料